

悲劇の主人公としての Pandarus

—Boccaccio の Pandaro との比較において—

川 上 彰 子

Chaucer が *Troilus and Criseyde* を書くにあたり、Boccaccio の *Il Filostrato* を直接用いたことはよく知られている。Chaucer は大まかな筋では Boccaccio を引き継いでいるものの、様々な箇所を手を加えていて、主要登場人物——Troilus, Criseyde, Pandarus——の人物設定の仕方も変更している。特に Pandarus については Boccaccio における Pandaro よりも遙かに重要な役割を持たせている。ここではこの Pandarus に焦点を当て、Chaucer がどのように、また何故に Boccaccio の Pandaro の役割を変えたのかを明確にしたい。

Pandarus と Pandaro でまず決定的に違うのは二人の年齢である。Boccaccio では Pandaro は「血統が良く、意気軒高な若いトロイ人」(“un troian giovinetto, /D’alto lignaggio e molto coraggioso;” [II, 1])(1)と紹介されていて、Troilo と同年代になっているが、Chaucer においては Pandarus の年齢についての言及はないのである。しかし幾つかの点から Pandarus が Pandaro よりも大分年長だということが言えるであろう(2)。まず第一に Boccaccio では Pandaro は Criseida の従兄となっているのに、Chaucer では Criseyde の叔父となっている点である。第二に Pandaro が戦場に赴く若者であるのに、Pandarus に関してはそのような記述が見られないことである。Pandaro は Troilo が Criseida の裏切りを夢で知って自殺しようとしている時に、「死ぬなら一緒に戦場で死のう」(“Andremo adunque contro a’ Greci armati, /Quando morir vorrai, issiememente:” [VII, 45])と若者らしく言うのである。これに対し Pandarus は、Troilus が戦場に行っている日に Criseyde を訪問していて、それを含め彼の戦士としての記述は全体を通して認められない。第三に Pandarus は豊富な人生経験によって知り得たであろう

と思われる格言を数多く述べていて、その数は Pandaro の比ではないことである。Pandarus はふんだんに格言を用いて、自らを八方塞がりの非現実的世界に置いている Troilus を可能性にあふれた現実の世界へと引き戻している (I, 631-34, 638-48, 806-09 等)。これも現実的分別のある年長者、叔父の立場のなせる業であろう。第四に Pandarus も Pandaro も自分の恋を成就させていないという設定になっているが、Pandarus は Pandaro と違って自分の恋を笑いの種にできるのである。Criseyde に恋の進み具合を問われ、彼は “By God I hoppe alwey behynde!”⁽³⁾ (II, 1107) と言ったり、“Nece, I have so grete a pyne/ For love, that everich other day I faste—” (II, 1165-66) と言ったりして自分の恋を茶化し、Criseyde を笑わせている。これは Pandarus が年齢的に自分の恋を成就させる可能性の少ないことを知っていて、ある程度客観的に自分の恋を顧みることができるからではあるまいか。

このように見ると多くの批評家の認めるように、Pandarus が Pandaro より、また Troilus より大分年長だと考えるのが自然であろう⁽⁴⁾。「若い従兄」から「年長の叔父」への書き換えは、Pandarus を Pandaro よりも遙かに深い形で Troilus と Criseyde の恋に係わらせるのに必要であったと思われるが、それに関しては後で触れることにする。

次に仲介者としての Pandarus と Pandaro を比較したい。Chaucer は Pandarus に、Pandaro には見られない二つの大きな働きをさせている。一つは Deiphebus の館で Troilus と Criseyde が会うように仕組むこと、もう一つは Pandarus の家で恋人達が一晚を共にするように仕組むことである。両方の場合とも Pandarus は事前に入り組んだ計画を立て、二人の逢い引きを成功させている。前者における恋人達の密会場面で、Pandarus が終始同席していること、また後者における恋人達の初夜の場面でも、恋人達が抱き合い、これ以上第三者の存在が許されなくなるまで彼が同席していることは非常に興味深いことである。なぜなら Pandaro は念入りな計画を立てたり、恋人達の逢い引きの場所に自分も加わることは決してないからである。Troilo の Criseida への思いを聞いた後、Pandaro は時を置かずすぐに Criseida のもとに行き、素早く用件を切り出す。Troilo の名前を彼女に告げるのも、Pandarus に比べればかなり早くなっていて、因みに Boccaccio では Pandaro が Criseida の家に着いてから Troilo の名前を口にするまでの行数は 101

行でしかないのに、Chaucer では実にその倍以上の240行にもなっているのである。それは Pandarus が Criseyde に持ってきた「はしゃぎたくなるような話」(“a thyng to doon yow pleye” [II, 121]) を彼女に伝えるのを故意に遅らせ、彼女をじらすことで、Troilus が彼女を愛しているという告白をより衝撃的なものに行っているからである。このような計略家的手腕は Pandaro には見られない。彼はもっと率直である。Pandaro は Criseida が色良い返事をしたことに満足し、すぐに Troiolo のところに行って返し吉報を告げ、Criseida の反応を見たがる Troiolo に同伴して再び彼女の家まで行く。つまり Pandaro は一日の内に三回も二人の間を行き来して、Pandarus のように Troilus の愛を告げるのを後日に回すことはないのである。Pandaro という人は思い立ったらすぐに行動に移し、決して入り組んだ計画を練ったりはしない。恋人達の初夜の場面でも Pandaro は Troiolo を Criseida の家に案内するだけで、後はすぐに姿を消してしまうのである。

このように Pandaro が単なる仲介者に徹しているのに対し、Pandarus は何もないところから形あるものを造り出していく積極的な仲介者であると言えよう。それでは何故 Pandarus は恋人達の為に単なる仲介者以上の行動を取っているのであろうか。その理由として、Pandarus が Troilus の姿を自分に重ねて行動していることが考えられよう。Pandarus にしても Pandaro にしても、恋の成功者ではないという設定になっていることは前にも述べた通りである。Pandaro は「自分が悲しい恋をしているのは、それを秘密にできなかったからだ」(“Io ho amato sventuratamente,/Ed amo ancora per lo mio peccato;/E ciò avvien, perchè celatamente/Non ho, siccome tu, altrui amato.” [II, 11]) と述べてはいるが、実際に彼が恋に苦しんでいる姿は見られない。これに対し、Chaucer はII巻の冒頭に恋に苦しむ Pandarus の姿を描いている。

That Pandarus, for al his wise speche,
Felt ek his part of loves shotes keene,
That, koude he nevere so wel of lovyng preche,
It made his hewe a-day ful ofte greene.
So shop it that hym fil that day a teene
In love, for which in wo to bedde he wente,
And made, er it was day, ful many a wente. (II, 57-63)

ここでの Pandarus は Criseyde を恋慕って苦しむ Troilus の姿と重なっている。しかし Pandarus は盲目的な Troilus と違い、前にも述べたようにある程度自分の恋を客観的に見ることができるのである。つまり彼は愛の世界と現実の世界の両方に住んでいるのである。そしてそれは多分、Pandarus の年齢から来る分別によるものであろう。

その決して若くはない Pandarus の目の前に、王子であり、勇敢な騎士であり、若く容姿の整った Troilus が恋に苦しんでいて、またその相手が都合のよいことに自分の姪である未亡人の Criseyde だというのである。現在の彼女の事実上の保護者が自分であることを考え合わせると、この恋の成功は疑いない。自分の恋には望みが見いだせず、もう若くはない Pandarus が年齢も若い Troilus の姿を自分に重ね、自分自身も心情的に恋の成功を味わおうとしても不思議なことではない⁽⁵⁾。Pandaro と比較すると、Pandarus の Troilus への思い入れの強さは際立っている。Pandaro は Criseida に Troiolo の愛を告げた後、彼女が彼の愛を受け入れなければ、彼は死んでしまう、と脅しにかかる。

“Tu che farai? starai tu altiera,
E lascerai colui, che se non cura
Per amar te, a morte tanto fiera
Venire, a rio destino o ria ventura,
Ch’un sì fatto uomo per te amando pera?” (II, 64)

Pandaro はこの時、Troiolo の死だけを強調しているが、Pandarus の脅しの言葉では Troilus と自分自身の死が強調されている。

“But if ye late hym deyen, I wol sterve—
Have here my trouthe, nece, I nyl nat lyen—
Al sholde I with this knyf my throte kerve.

.....

If that ye don us bothe dyen
Thus gilteles, than have ye fisshed fayre!

What mende ye, though that we booth appaire?” (II, 323-29)

そして Chaucer は Pandarus が実際に「Troilus への同情のあまり死にそうになった」(“Wex wel neigh ded for routh, sooth to seyne” [II, 1356]) と記している。Deiphebus の館で Troilus が Criseyde に苦しい胸の内を告げると、Pandarus は同情してむせび泣き、姪をつつい

て、“For love of God, make of this thyng an ende,/Or sle us both at ones er ye wende.” (Ⅲ, 118-19) とまた、誓すのである。彼は自分の死を強調する程 Troilus の姿を自分に深く重ね、Troilus の苦しみを見ては涙を流す。そして今度は Troilus が喜びの絶頂にいるのを見ては、自分があたかも恋の成功者であるかの如く感激するのである。Deiphobus の館で Criseyde がベッドに横たわっている Troilus を抱き、口づけするのを見るや、Pandarus の感激は最も高まる。彼は跪き、天に目を向け、手を高くあげて言うのである。

“Immortal god that mayst nought deyen,

Cupide I mene, of this mayst glorifie;

And Venus, thow mayst maken melodie!

Withouten hond, me semeth that in the towne,

For this merveille ich here ech belle sowne.” (Ⅲ, 185-89)

そして Criseyde と一緒に部屋を出た後も Pandarus はすぐさま Troilus のもとに戻り、喜びを分かち合うのである。

And on a paillet al that glade nyght

By Troilus he lay, with mery chere,

To tale; and wel was hem they were yfeere. (Ⅲ, 229-31)

Pandarus の Troilus への思い入れの強さは、恋人達に一晩を過ごさせるという目的に向けて、更に彼の行動を積極的なものにしていく。Pandarus が積極的にならざるを得ないのは、Boccaccio に比べて Chaucer の恋人達が消極的に描かれているからである。Troilo はまず、恋の経験者として登場するが、Troilus は恋の経験のない若者である。だからこそ彼の胸に愛の神が矢を打ち込んだ時、今まで全く知らなかった愛の世界に純粋な気持ちでのめり込むのは当然であろう。Troilo は経験があるだけに、自分が Criseida に対して何がしたいのかがはっきりわかっている。彼は「冬の一晩を貴女と過ごせたら地獄で 150 日留まりましょう」(“Or foss’io teco una notte di verno,/Cento cinquanta poi stessi in inferno.” [Ⅱ, 88]) と述べ、自分の目的が Criseida との肉体関係だということを明らかにしている。そして初夜の際も Pandarus の手引きはあったものの、後は Troilo は一人で Criseida が来るのを待つ程積極的である。これに対し Troilus はあくまでも純粋に Criseyde の女神のような美しさに感嘆し、彼女を崇め、自分はひたすら遜るので

ある。彼は Deiphebus の館においても、手紙の中でも、ただ曖昧に彼女の慈悲を願うだけであり、Troilo のようにはっきりと自分の目的を述べることはない⁽⁶⁾。彼はあまりにも弱々しく、純粹すぎるのである。Pandarus にとって Troilus はまさに “wrecched mouses herte” (Ⅲ, 736) を持つ男なのであろう。Boccaccio の Criseida も Troilo 同様、積極的である。Pandaro に、いつ Troilo が彼女を訪れてよいのかを聞かれると、彼女は自分で場所と日時を決めてしまう。Troilo が秘かにやってきた時も、自分で彼を自室に導くのである。つまり Boccaccio では Troilo も Criseida も積極的で、Pandaro の活躍する余地は殆どないので、Chaucer では二人が消極的なため、Pandarus が大活躍することになるのである。ついに Pandarus は失神した Troilus を Criseyde のベッドに運び入れ、衣服を切り裂き、シャツ一枚にしてしまうということまでやってのけるのである⁽⁷⁾。これに対し Boccaccio では Troilo の失神は Criseida と Antenor の交換が決定された会議の際に起きるので、Pandaro の出番は全くないのである。Chaucer による Troilus の失神場面の変更は、Pandarus をより深く恋人達に係わらせ、彼の役割を重要なものにしてている。

Pandarus は Troilus の姿を自分に重ねて行動し、また Boccaccio の恋人達の積極的な行動の一部分も担っている。従って彼と恋人達との間は、Boccaccio におけるそれよりも遙かに親密なものになっている。それは Pandaro が二人の恋の単なる仲介者にすぎないのに、Pandarus は恋人達に自分を加えた三人による恋の成立を強調していることから明らかである。Pandaro は Troilo に、「もしあなたがこの恋を秘密にできるなら、私はお二人を喜ばせることができますよ」と述べる。

“Poichè sentendo te saggio ed accorto,

A lei e ad amendue posso piacere,

E a ciasucuno donar pari conforto,

Poscia che occulto il dovete tenere,

E fia come non fosse;...”

(Ⅱ, 28)

この Pandaro の、自分と恋人達の上に距離を置いた発言に対し、Pandarus は、

“...; for ye ben bothe wyse,

And konne it counseil kepe in swych a wyse

That no man schal the wiser of it be ;

And so we may ben gladed alle thre."

(I, 991-94)

と言って三人が喜ぶことを強調することで、恋人達との間に距離を置かず、自身を舞台の中央に押し出しているのである。

Pandarus はしかし、いつまでも舞台の中央にいられる訳ではない。失神した Troilus が回復し、いよいよ Criseyde との初夜を迎える時になると、Pandarus は自分が最早、二人にとって用なしであることを自覚せざるを得なくなるのである。彼は "For aught I kan asprien,/This light, nor I, ne serven here of nought." (III, 1135-36) と言い、やがて部屋を出て行く。ここでの Pandarus は、二人のためにこれ以上何もすることがないことを悟った哀れな男なのである。

Pandarus は前述のように、愛の世界と現実の世界の両方に属している。Troilus の Criseyde の前に跪く時も、彼は Troilus のためにクッションを取りに行くのを忘れることはない。つまり彼は Troilus の立場に立ってこの恋愛を楽しんでいるのであるが、決して愛の世界だけに浸ることはできず、第三者の立場にも立って現実として Troilus の膝のことまで考えてしまうのである。Chaucer が彼だけにしか単純な運命観を持たせていないのは⁽⁸⁾、彼が愛と現実の二つの世界に属していて、純粋に愛の世界だけには浸れない人間だからかも知れない。その反対に恋愛によって Criseyde は "fals felicitee" (III, 813-40) と "jalousie" (III, 988-1050) について、また Troilus は "the prescience of God" と "oure fre chois" (IV, 958-1078) について論じられる程成長するのである。Pandarus は二人のこれらの独白の場面に一緒にいながら、決して二人の論には応じない。彼が言うのはいつも「運命の女神の回す車輪は決して止まることはない」ということだけなのである。単純な論理しか持たず、精神的成長が全く見られない Pandarus には、成長した二人の論に口をはさむことはできないのである。

Criseyde と Antenor の交換決定の際も、愛と現実の世界に二股をかけている Pandarus は現実を見据えて、Troilus に別の女を捜すように言うが、純粋に愛の世界に浸っている Troilus は聞く耳を持たない。現在の Troilus は、かつて Pandarus の忠告を素直に聞き入れてきた Troilus では最早ないからである。分別のある年長の忠告者 Pandarus と、彼の忠告なしには何もできなかった Troilus の関係はここにきて全

く逆転してしまうのである。Troilus は Pandarus に向い、“O, where hastow ben hid so longe in muwe,/That kanst so wel and formely arguwe?/Nay, God wot, nought worth is al thi red,…” (IV, 496-98) と言い放つのである。そして捕虜交換決定を境にして以前は活動的であった Pandarus の姿は消え、全く無力の人になってしまう。彼が Troilus にできるのは、表面的な言葉で慰めることだけである。

Criseyde が去った後、無力の Pandarus に比べ Boccaccio の Pandaro は、Troilo にたのまれ何度かギリシヤ陣営にいる Criseida のもとに赴いて (VIII, 3), 実際に Troilo の役に立っている。また Troilo が夢で Diomede と Criseida の関係を知り、自殺しようとする時に、Pandaro はやっとのことで Troilo から剣を取り上げて彼の命を救っている (VII, 33-36)。Criseida との別離による悲しみで体力的に衰えたとはいえ、Hector に次ぐ強者 Troilo の力をねじ伏せる Pandaro には若さと力強さが感じられる。Chaucer は自分の作品ではこの部分を省略している。彼は何故、この大事な場면을削除したのであろうか。筆者はここに Chaucer の Pandarus 観がはっきり示されているように思うのである。年長の、弁が立つだけの Pandarus にはこの場面は全くそぐわず、若く、力強い Pandaro であるからこそ、この行動は可能なのである。この場面の削除によって、Chaucer は Pandarus の無力さを更に明確にしたかったのではないか。

この無力の Pandarus が徹底的に打ちのめされる事件が起きる。それは Criseyde の裏切りが判明したことである。彼は姪の裏切りを恥じ、Troilus に “And fro this world, almyghty God I preye/Delivere hire soon! I kan namore seye.” (V, 1742-43) と言い、それが彼の最後の言葉になる。最早彼は Troilus に対して表面的な言葉だけの慰めも与えられないのである。言葉を駆使してきた Pandarus が「もうこれ以上言う言葉がない」と言うのは、彼の敗北宣言であろう。

この Pandarus とは違い、愛の世界で精神的に成長した Troilus は自分の死を願い、ついに Achilles に殺される。しかし彼の魂は第八天に昇って全ての苦しみから解き放たれ、現世を笑うという救済からなされるのである⁽⁹⁾。Criseida についてもある種の救済がなされている。彼女は仕方なく Troilus を裏切りはしたものの、Diomede に対しては “...syn I se ther is no bettre way,/And that to late is now for

me to rewe,/To Diomede algate I wol be trewe.” (V, 1069-71) と心の中で誓うのである。彼女はトロイにいた時はずっと Troilus に誠実であって、決して移り気ではない。また彼女は Boccaccio の Criseida のように、すぐに恋人になる可能性を Diomede にほめかすことはない。状況の変化で仕方なく Troilus を捨て Diomede に走ったことは、愛の道徳上許されることではないが、Diomede には何としてもこれからは誠実でいようとするのは彼女なりに一理あるところである。それは彼女が恋人と接している間は身心共に相手に捧げているからこそ与えられた救済かも知れない。

しかし Pandarus だけには Chaucer は何の救いも与えていないのである。彼がこの話にコミカルな味つけをするために創作されたのは事実であろう。しかし Chaucer の意図はもっと深かったのではないか。彼がこの作品を書いたのは大体1385年頃と考えられる。Boccaccio が22歳の時に *Il Filostrato* を書いたことを考えれば、45歳の Chaucer は大分年長である。そして失恋状態にあった Boccaccio が Troilo を自分に重ねて書いたのと同じようには当然 Chaucer は書けなかったはずである。彼は Pandarus を若者から年長者に変えることによって、恋の成功を味わうことなく精神的に成長しないまま年を取ってしまった中年男の屈折した悲哀を同じ中年の目から描きたかったのではないか。

Pandarus は一見すれば冗談好きの明るい好人物である。しかし観点を変えれば彼ほど可哀そうな人物もいないのである。彼は自分自身の恋に希望が見いだせないでいる。そして年齢的にも、最早彼にはこの先望みはないであろう。たとえ Troilus の恋にかこつけて若い Troilus に感情移入することで恋人達の恋愛を楽しんでも、いつまでも自分が恋人達と同席する訳にもいかず、結局自分は恋愛の当事者ではなく、恋人達には無用の者だと自覚せざるを得ない。彼の悲劇が決定的になるのは恋人達同様、捕虜交換が決まった時である。捕虜交換によって彼の今までの苦勞は水泡に帰するのである。また Criseyde との別離以降は Pandaro と違い、Troilus のために何の役にも立っていない。役に立つどころか、はじめはいわば Troilus の人生の師であった Pandarus は、愛の世界で成長した Troilus の論理についていかれず、逆に Troilus に「君の忠告は全く無駄だ」(IV, 498) と言われてしまうのである。や

が Criseyde の裏切りが判明すると父親の代わりを自負していた Pandarus は恥ずかしさと怒りでもう何も言えなくなる。そして Troilus が戦死した後は結局彼だけが恋人達とは違い、何の救いもないままトロイに残される訳で、そのトロイとていずれ滅びる運命なのである。こうしてみると Pandarus の悲劇は Troilus の “double sorwe” (II, 1) どころか、三重にも四重にもなっているのである。Chaucer はこのように Boccaccio とは全く異なる Pandarus を描くことによって、運命に翻弄された Troilus と Criseyde の他にもう一人の悲劇の主人公を描き、そのことで *Troilus and Criseyde* には幾重にも悲劇が重なり合っていることを言いたかったのではないかと思われる。

<注>

本稿は、日本中世英語英文学会東支部第四回研究発表会（昭和63年6月24日、於成城大学）において口頭発表したものに基づいている。

- (1) N. E. Griffin and A. B. Myrick, tr. *The Filostrato of Boccaccio* (New York: Biblio and Tannen, 1967), p. 163. *Il Filostrato* からの引用は全て、このテキストによる。
- (2) Pandaro と Pandarus の年齢については D. S. Brewer, *Tradition and Innovation in Chaucer* (London and Basingstoke: Macmillan, 1982), pp. 80-88 を参照。Brewer は Pandarus が Pandaro よりも年長と思われる理由として、①Troilus の忠告者であること、②手紙の書き方を知っていること、③占星術を知っていること、④数多くの格言を使用すること、⑤冷笑的であること、⑥戦士ではないこと、を挙げているが、筆者は⑤に関しては意見を異にする。それは Pandaro の Troiolo に対する「女はもともと好色なものだ」(II, 27) という励ましという言葉などから Pandaro の方がより冷笑的だと思われるからである。
- (3) L. D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer based on the Works of Geoffrey Chaucer, ed. by F. N. Robinson* (Boston: Houghton Mifflin, 1987), p. 504. *Troilus and Criseyde* からの引用は全て、このテキストによる。
- (4) Tatlock や Williams は、Pandarus が Troilus と同年代の若者である、という説を取っている。J. S. P. Tatlock, “The People in Chaucer’s *Troilus*,” *PMLA*, LVI (1941), p. 95, 及び George Williams, *A New View of Chaucer* (Durham, NC: Duke University Press, 1965) p. 77

参照。

- (5) W. E. H. Rudat, "Chaucer's *Troilus and Criseyde*: Narrator-Reader Complicity," *American Imago*, 40 (1983), p. 107: "Perhaps one could interpret that Pandarus is using Troilus as a substitute for himself, i. e., that he is a *senex amans* who employs young Troilus to perform what he himself is capable of doing only in his fantasies." Rudat は更に, Pandarus と Criseyde の親密性からこの二人の性的関係の可能性を強調しているが, 筆者は同意できない。それを認めるのは *Troilus* がロマンスであるという概念を根底から覆すものであるからである。
- (6) Winthrop Wetherbee, *Chaucer and the Poets* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1984), p. 63. Wetherbee は "While Pandarus pursues his elaborate design, Troilus will continue to experience love on the visionary plane, and his Dantean imaginative integrity will endow this love with a significance beyond Pandarus' power to comprehend or wholly subvert." と述べていて, Pandarus と Troilus との距離を強調している。
- (7) Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition* (Berkeley: University of California Press, 1957), p. 152: "This is the first time in medieval literature that the go-between must go so far as actually to pick up the hero and throw him into the lady's bed."
- (8) *Troilus* における運命観は Boethius の影響である。T. A. Stroud, "Boethius' Influence on Chaucer's *Troilus*," *Modern Philology*, XLIX (1951-2): rpt. in *Chaucer Criticism* Vol. 2, eds. Schoeck and Taylor (Indiana: University of Notre Dame Press, 1965), p. 129: "Pandarus is the philosophical antithesis of Troilus as he defends Fortune against Troilus' strictures: since it is the nature of the goddess to alternate her favors, man has no right to blame her; in fact, he should take courage in adversity that her wheel does revolve. From this position, derived from the first stage of the *Consolation*, Pandarus never varies."
- (9) Troilus は I 巻で登場する時に, 恋に苦しんでいる人々を見て嘲笑するが, この笑いは第八天からの笑いとは全くの対照をなす。Alfred David, "The Hero of the *Troilus*," *Speculum*, XXXVII (1962), p. 570: "The first is the laughter of ignorance, the second, of wisdom."